

〈論 文〉

岸信介と蔣介石

—— 蜜月関係の実相 ——

丹 羽 文 生

要 旨

1957年6月、首相の岸信介は第1次東南アジア歴訪の最後の訪問地として台湾を訪れ、その際、初めて総統の蔣介石との対面を果たした。以来、岸は足繁く台湾に通うようになり、蔣介石との信頼関係を築き、刎頸の交わりを結んだ。やがて岸は自民党における「親台派の中心人物」となっていく。

1971年10月の国連脱退、翌年9月の日中国交正常化による断交後も変わらぬ交流を続け、蔣介石逝去に際しては大規模な弔問団を率いて台湾に飛び、生誕100周年の時も「以德報怨」を金看板に蔣介石を讃える国民運動を全国で繰り広げた。しかし、岸は無条件に蔣介石を賛美していたわけではなかった。少なからず不信感を抱いていたことも事実である。

2人の個人的関係は戦後日台関係史を語る上でも重要なファクターであるが、それを単独で扱った先行研究は皆無である。本稿では主に台湾側の外交史料を用いながら、当時を知る人物へのインタビューも交え、その蜜月関係の内実を検証していく。

キーワード：岸信介、蔣介石、以德報怨、大陸反攻、中華民国

はじめに

自民党には結成当初から「いくつかの路線対立があった」が、中でも「中国をめぐる対立は最大のもの」で、それがピークに達するのは1972年7月の田中角栄内閣発足直後、すなわち田中が「いよいよ日中国交正常化にとりかかったとき」だった⁽¹⁾。言うまでもなく日中国交正常化は台湾の「中華民国」との断交と表裏関係にある。この時、台湾擁護を訴える自民党の「親台派の議員たち」は「激しく抵抗」した⁽²⁾。石井光次郎、賀屋興宣、灘尾弘吉といった長老クラスや、後に血判状を捺して結成される「青嵐会」の中核メンバーたちである。

そんな彼らの中心にいたのが岸信介であった。特に岸の場合、1957年6月以来、総統の蒋介石と何度も会談を重ね、個人的親交を結び、「余人をもって代えることが出来ないほど深かった」と言われるほどの蜜月関係を築いた⁽³⁾。

岸と蒋介石との関わりについて論じた先行研究としては、小山展弘の『脱占領時代の対中政策：戦後の日本は中国とどう向き合ったか』（志學社、2012年）、若宮啓文の『戦後70年保守のアジア観』（朝日新聞出版、2014年）、『横浜商大論集』第39巻第2号に掲載されている田才徳彦の「自由民主党にみる『親中国派』と『親台湾派』の相克：冷戦下における対立の要因と諸相」（横浜商科大学学術研究会、2006年）が挙げられる。ただ、いずれも主題の中の一部として取り上げているだけで決して十分とは言えない。本稿では、これら先行研究を用いながらも、主として外務省外交史料館が所蔵する外交史料、台湾の中央研究院近代史研究所檔案館や国史館に保存されている外交部の「檔案（外交史料）」、当時を知る人物へのインタビューも交えて、さらに深く掘り下げ、知られざるエピソードを拾い上げながら2人の蜜月関係の実相を検証していきたい。

1. 岸と「反共」

1946年6月、毛沢東率いる中国共産党と蔣介石率いる中国国民党との間で第2次国共内戦が勃発する。この武力抗争は約3年半にも及んだが、最終的に中国共産党が勝利し、1949年10月1日、毛沢東は中国大陆の北京を首都とする「中華人民共和国」の建国を宣言した。一方の国民党は台湾に逃れ、台北を臨時首都に「中華民國」を移植する。ここに「2つの中国」の原型ができた。

日本は日華平和条約により中華民國を正統政権と認める一方、中国とは外交関係はないにしても、戦前からの中国大陆との経済関係まで遮断するはわけにはいかなかった。時の首相の吉田茂も日華平和条約を了としながらも、一方で中華人民共和国の存在を否定することには躊躇していた。吉田は次のように回想する⁽⁴⁾。

私としては、台湾との間に修好関係が生じ経済関係も深まることは、もとより望むところであったが、それ以上に深入りして、北京政府を否認する立場に立つことも避けたかった。

1949年5月に「中日貿易促進会」、間もなく「中日貿易促進議員連盟」が発足し、1952年6月には民間協定として第1次日中民間貿易協定が結ばれ、その後、1953年10月に第2次日中民間貿易協定、1955年5月に第3次日中民間貿易協定と深化していき、漸進的に民間レベルによる日中貿易は拡大していった。いわゆる「積み上げ方式」と呼ばれるものである。

当時、日本は「政治」と「経済」を切り離した上で中国との経済関係を進めていこうとする「政経分離」を掲げた。しかし、政経分離とはいいながら、その距離は次第に縮まっていき、政治関係までも緊密化していくよ

うな「政経不可分」の傾向が見られるようになる。保守合同後の1956年10月、首相の鳩山一郎が日ソ国交回復を実現させると、「同じ共産圏である中国政府との関係改善を期待する声」が強くなっていった⁽⁵⁾。国連でも1949年11月に中国が中華民国の追放を提起して以来、徐々に、それを支持する国が出始めた。

ところが、鳩山の後を継いだ石橋湛山の病気退陣による政権禅譲で岸信介が宰相の椅子に座ると日中関係に暗雲が立ち込める。「反共」を旨とする岸にとって共産主義政権が君臨する中国という存在は好ましからざるものであったことは容易に想像できる。岸は自らの「反共」というスタンスについて「日本を共産主義化するというような場合には、われわれがそれを認めない」と強調し、続けて「自由を脅かすあらゆるものを排撃して、自由を防衛していくことが結局は政治の基礎だと思うんだよ。その点共産主義は人間の自由を認めないからね」と述べている⁽⁶⁾。これは中国を念頭に置いたものではないにしても「自由を脅かす」恐れのある「共産主義」に強いアレルギーを持っていたことが分かる。故に中国大陆を支配する共産主義政権に対峙する蒋介石に対してシンパシーを抱くのは自然であろう。

岸にとって「共産主義の侵略の排除と自由外交の堅持」は「日米経済の提携とアジアとの通商」と「憲法改正と独立国家体制と整備」と並ぶ「岸戦後政治の原点」でもあった⁽⁷⁾。岸は首相就任直前のインタビューで「日ソの国交が正常化されたから次は日中だ」という雰囲気が高まる中、そのような考えは「毛頭もっておりません」と断言し、次のように語っている⁽⁸⁾。

われわれは決して従来 of 自由陣営の立場を捨てるわけじゃありません。共産圏との国交を正常化するということは、中立政策に変わったとか、あるいはソ連に接近するということではない。あくまでも自由陣営の立場でいく。

こうした時期と前後して、「自民党所属の国会議員のなかで『親台湾派』と呼ばれたグループが組織」された⁽⁹⁾。その端緒は1956年8月、自民党総務会長の石井光次郎を団長に結成された「日本各界中華民国親善訪問団」の訪台である。旗振り役は国策研究会代表常任理事で政治運動家の矢次一夫で、政界のみならず、財界、言論界、学術界から合計26名が参加した。滞在中、メンバーは蔣介石にも面会した。

その際、同席していた総統府秘書長の張群と矢次との間で「日華の間に親善を深める機関を何かつくろうじゃないか」という約束を交わし⁽¹⁰⁾、結果、岸内閣発足翌月の1957年3月、「中華民国と日本国の間の政治、経済、文化等各種の親善提携及び共同合作、並びに全アジアの復興を促進するための中心機構」を目指すべく⁽¹¹⁾、民間団体として日本側に「日華協力委員会」、台湾側のカウンターパートとして「中日合作策進委員会」が設立された。ただ中日合作策進委員会は「民間有志の士」で構成するとしながらも⁽¹²⁾、「反共協力体制を固めるための布陣」を敷くため国民党の大物ばかりが名を連ねた⁽¹³⁾。

岸は現職首相のため、日華協力委員会の初期メンバーには入っていない。後に顧問として加わるが、当初から岸のプレーントラスト的な色彩を帯びており、やがて自民党における「親台派の中心人物」となっていく⁽¹⁴⁾。

そんな彼らの「思想的バックボーン」には、「反共陣営としての台湾の重要性」に加え、蔣介石の「以德報怨」が存在していた⁽¹⁵⁾。岸の側近で後に防衛庁長官や農林大臣を務めた松野頼三も「岸さんが台湾を重視した理由」として「蔣介石のいう以德報怨」を挙げている⁽¹⁶⁾。

これは、1945年8月15日、蔣介石が重慶の中央広播電台において「抗戦勝利告全国軍民及全世界人士書」を読み上げ、戦勝を告げると同時に敗戦した日本に対する報復を強く戒めたというものである⁽¹⁷⁾。台湾最頂で知られる自民党の大御所的存在だった賀屋興宣は、これを「重大恩義」と呼び、「蔣介石総統の有名なことば『暴に報いるに徳をもってす』という

ことを徹底」し、「日本の天皇制の維持であるとか、日本の戦後の分割占領の防止、また賠償の放棄、二百数十万の軍隊、在留邦人の無事帰還とか、普通ではありえないような厚い好意すら台湾は取っていたのである」と述懐している⁽¹⁸⁾。「以德報怨」は「『親台湾派』と呼ばれたグループ」はもちろん、多くの日本人の「対国民政府観・対台湾観に大きな影響」を与え、「蒋介石という個人をシンボライズするかたちで肥大化」していき、「一種の蒋介石神話が創造され」ていった⁽¹⁹⁾。

「以德報怨」は蒋介石にとっても常套句だった。日中関係に進展が見られると、その都度、「以德報怨」を持ち出し、日本を牽制した。さらに「中華民国が受けた損害は、まさに天文学的数字に達し、肉親を失った人びとの悲しみは、大金をもってしてもあがなえないほど大きい。しかしここで多額の賠償を取り立てることは、戦後の日本の生命を奪うにひとしい。赤色帝国主義が日本をねらっているいま、多額の賠償負担によって日本を弱体化するような措置は避けなくてはならない。アジアの安定のためには、日本が強力な反共国家であってくれなくてはならないのだ」と述べているように⁽²⁰⁾、「反共」に直結するものでもあった。「以德報怨」は単純な善意というわけでもなかった。

2. 岸の台湾訪問

1957年2月、石橋湛山内閣は余りに呆気なく崩壊した。首班指名から間もなく過労で臥床した石橋は、そのまま公務に戻ることなく在任期間僅か65日間で総辞職に至る。石橋の辞任を受け、自民党は外務大臣で首相臨時代理の職にあった岸を後任とすることと決し、総辞職から2日後、岸内閣発足と相成った。巣鴨プリズン出所から8年2ヵ月、政界復帰から3年10ヵ月後のことである。「柵から牡丹餅」の如く宰相ポストが転がってきたためか、内閣発足に際し岸は石橋内閣のメンバー全員を留任させた。

それ故、「中国側の岸内閣に対する評価」は「石橋路線を受け継ぐもの」と見られていた⁽²¹⁾。石橋は当初から「中国との国交を回復したいと言う強い決意を秘め」ており、中国の「反応も比較的良好」だった⁽²²⁾。

ところが、中国側の期待は見事に裏切られる。最大の原因は岸の台湾訪問であった。5月20日、岸は首相就任後初の外遊として第1次東南アジア歴訪に出発した⁽²³⁾。岸が命運を賭けて取り組むことになる日米安保条約改定に向けた訪米の外交的布石を打つことを趣旨としたものである。「アメリカと交渉する場合に、孤立した日本ということでなしに、アジアを代表する日本にならなければいけない」と考えたのである⁽²⁴⁾。日本のアジアにおける存在感を高めることによって、日米関係を対等なものにしようという目論見であった。訪問先はビルマ、インド、パキスタン、セイロン、タイ、そして最後の訪問地として選んだのが台湾だった。

岸が台湾に到着したのは6月2日のことだった。「中華民国」成立以来、最初の現職首相の訪問である。この時、到着時間が深夜の午後11時25分であったにも関わらず、行政院長の俞鴻鈞を始め、約350名もの人々が揃って出迎えた⁽²⁵⁾。

翌日午後4時10分から岸と蔣介石との会談が士林官邸にて行われた。台湾側は本人以外に副総統の陳誠、俞鴻鈞、張群、外交部長の葉公超、駐日台湾大使の沈觀鼎、記録係として駐日台湾大使館参事官の宋越倫が入り、日本側は駐台日本大使の堀内謙介、官房副長官の北沢直吉、外務政務次官の井上清一、外務省アジア局長の中川融が同席した。2人にとって、これが初対面である。

後に岸は、蔣介石の第一印象について「風雪に堪えて円熟の境地に達した、大人の風格であった。『威有って猛からず、温顔以て人に接す』という感じであった」と回想している⁽²⁶⁾。当時、岸は61歳、蔣介石は71歳であった。日本、台湾いずれの公式記録にも載ってはいないものの、まず岸は「以德報怨」に言及し「日本国民は決してその恩を忘れない」と述べ

ると、蔣介石は「『恨みに報いるに徳をもってせよ』という考えは実は自分が若いとき日本に留学した際、武士道の精神を当時とくに頭山先生、犬養先生といった方々から実践を通じて教えこまれたものだ。それは東洋思想の基本であると同時に、日本の精神であってそのことが印象的であった。だから、私に感謝するというよりも、日本自身がもっている諸先輩の精神に感謝してもらいたい」と答え、岸を感激させた⁽²⁷⁾。「頭山先生」とは玄洋社を率いた「東洋的巨人」と評される頭山満、「犬養先生」は五・一五事件で斃れた元首相の犬養毅のことである。岸は「なんという謙虚で、奥床しいお人柄か、と改めて一層の感銘を覚えた」という⁽²⁸⁾。

その上で岸は次の5項目について説明した。以下は、外務省外交史料館が所蔵する会談録の要旨からの引用である⁽²⁹⁾。

- (1) 日本外交の基調は(イ)国連尊重、(ロ)民主自由諸国家との協調、(ハ)アジア諸国との友好関係増進にあり、日華協力関係の増進は特に重要と考えておること
- (2) 通商問題については、米の買付問題につき妥結に努力しおところ、中国側においても日本商社の活動につき、更に便宜を図られたきこと
- (3) アジア開発基金及び技術研修センターの構想
- (4) 日華間文化交流を更に促進したきこと
- (5) 核実験中止問題に関する日本政府の考え方

(2)に出てくる「中国」は「中華民国」を指す。(5)の「核実験中止問題」とは当時、アメリカが相次いで実施していたビキニ環礁での核実験のことである。これに対し蔣介石は「原爆実験についての日本国民の懸念は充分理解できる。ただ共産党や反米運動に利用されぬよう留意する必要がある」と注意を促し、「日本外交の基調」に関しては「同感」であり、「現在

インドがアジアの盟主と自称しておる。真にアジアのリーダーたる実力を
具えておるものは日本を措いて他にない」と期待を寄せた⁽³⁰⁾。

台湾の中央研究院近代史研究所檔案館が所蔵している会談録を見ると、
これら以外にも、東南アジア歴訪の外交成果、中国大陆の共産主義政権を
含む共産主義勢力の脅威に関して意見が交わされている⁽³¹⁾。会談は1時
間50分にも及んだが、蔣介石からの要請で翌日に再会談を行うことと
なった⁽³²⁾。

再会談は4日午前10時から同じく士林官邸で開かれた。通訳を務めた
張群以外は、日本側からも台湾側からも誰も同席しなかった。余人を交え
ず「他人行儀な話はなし」で、本音で語り合いたいという蔣介石からの希
望だったようである⁽³³⁾。

日本側の記録では、会談録、その要旨のいずれも2人の発言は岸が1
回、蔣介石が2回のみである。「大陸反攻」を口にする蔣介石に対し、岸
は、これを巧みに躲し「日本の政策はあくまでも反共」と断言した上で、
日本において台頭する共産主義勢力との戦いに向けた決意を明らかにして
いる⁽³⁴⁾。台湾側の記録では、加えて在日米軍による不祥事、膠着状態に
ある日韓関係の打開策も議題に上っており、最後は「貴国の天皇陛下の健
康を祈念し、同時に大野、石井緒氏にも宜しく伝えてほしい」との蔣介石
の言葉で締め括られている⁽³⁵⁾。「大野、石井緒氏」とは自民党副総裁の大
野伴陸、副総理の石井光次郎のことである。

3. 「大陸反攻」支持発言

岸信介の台湾訪問に対し、当然のことながら中国は猛反発した。特に中
国を刺激したのが、蔣介石との会談で岸の口から出たとされる「大陸反
攻」支持発言だった。国共内戦に敗北し台湾に撤退した蔣介石は、以来、
軍事力を以て共産主義政権を撃ち破り中国大陆を毛沢東の手中から取り戻

すという「大陸反攻」をスローガンをとした。本来は中国全土が「中華民国」である。毛沢東に一時的に支配しているだけで、故に、そう遠くないうちに領土奪還を図ろうというのである。

岸が蒋介石に対して、これを支持すると明言したことは、岸が「『中国敵視』の姿勢を持っていることを証明するもの」とされてきた⁽³⁶⁾。例えば古川万太郎は『日中戦後関係史』（原書房、1981年）において、「『大陸反攻』を支持」との項を設け、次のように論じている⁽³⁷⁾。

この岸・蔣会談において、岸は中国をわが国への「脅威」として敵視し、「大陸の自由回復」を支持して日台協力のもとに北京政権の存立さえくつがえそうとする意志を明確にさせた。

では、古川は何を根拠にして、「『大陸反攻』を支持した」と強調しているのだろうか。古川が挙げているのは、当時、「朝日新聞」（1957年6月4日朝刊）が1面で報じた「岸『進んで経済協力』 蔣『反共を徹底せよ』3日の会談」との記事である。そこには3日に行われた2人の会談の様子が掲載されている。

ただし、記事の中に「大陸反攻」の文字は見当たらない。確かに「大陸の自由回復には日本は同感である」とは書かれているが、それは共産主義政権が牛耳る中国が自由社会になることに「同感」したのであって、武力という手段によって共産主義政権を打倒することを「支持」したわけではないと読み取れる⁽³⁸⁾。

では、日本と台湾に残された公式記録には、どのように記されているのだろうか。本来であれば正確を期すため全文を紹介すべきではあるが、本誌の投稿規定において文字数に制限があるため、若干、発言の前後を省略した。以下は、日本側の会談録である。まず3日の会談録から見てみよう⁽³⁹⁾。

岸（前略）日、華、米三国が理解と協力をもって結ばれば、アジアの将来には期待が持てると思う。

蔣（前略）今後日本がアジアの復興に寄与するためには矢張り大陸政策が必要である。それは必ずしも昔の大陸政策と同一ではなく、新しい大陸政策である。大陸の人民を援助し、これと合作する政策である。これがアジアの復興に寄与すると確信する。近年日本は東南アジアに眼を向けているが、根本的には中国大陆に眼を向けなければならない、大陸が中共に支配されている限り合作も、新大陸政策も存立出来ぬ。自由中国と協力し、大陸解放に協力することが日本の新しい大陸政策と思う。（中略）岸総理も民主自由の基調において反共の態度を明確ならしめ、中国の解放に対して力を貸されたい。（後略）

岸（前略）中共問題は中国の問題なるのみならず、アジアの問題である。（中略）大陸を中共が占めていることは日本にとって他国の問題ではない。

岸は中国大陆を共産主義勢力たる「中共が占めていること」は日本を含むアジアの脅威であるとの見方を示した。しかし、蔣介石からの「中国の解放」への協力に関しては明確な回答を避けた。次に4日の会談録である⁽⁴⁰⁾。

蔣 われわれは必ず中国大陆を回復し、自由中国にする信念あり。またその決意を有する。しかしそのためには中日合作が必要である。さらにその上に米国を入れて三国の合作が必要である。

岸（前略）日本人は中国に対して一種の郷愁を持っている。しかしそれは飽くまでも貿易上の関係についてであって政治的の関係を結ぶ考えはない。中共の代表権を認める考はない。ただ日本内地

の中小企業を保護する等の必要から貿易は推進したい。

蔣（前略）中共の問題については何も申し上げない。ただ通商代表を認めることは困る。必ずこれを足掛りとして工作する。（後略）

冒頭から蒋介石は「大陸反攻」への意欲を見せる。ところが岸は、それには全く言及せず、逆に「貿易は推進したい」と日中貿易への理解を求めた。蒋介石は岸の要請には是認も否認もしなかった。

続いて台湾側の会談録を見てみる。台湾側の会談録は日本側の会談録よりも詳細に記録されている。最初に3日の会談録である⁽⁴¹⁾。

岸（前略）目下、自由中国は困難に直面しているが、悠久の文化と伝統によって、その基礎は絶対に揺るがない。日本も中国文化の賜物によるところがあり、目下、その基礎は安定したものと言える。したがって、日華両国の協力はアジアの復興に、必ず貢献できるものである。（中略）日華両国の緊密な協力の必要性については十分に理解している。実際には、日華米の緊密な協力を拡大しなければならない。さもなければ、アジアの復興は難しいだろう。

蔣 今日の日本はアジアの復興の中心となるには最良の環境にある。日本さえ決心すればアメリカは必ず支援することは疑いない。（中略）過去において、日本は政策にしろ、人事にしろ、いずれも大陸を中心とするものだった。残念ながら軍閥が権力を独占し、運用は改善できず、全ての大陸政策は一瞬にして破壊された。そして日本は失敗の境地に至ったのである。私は、これからの日本は政策決定においては、やはり大陸政策を中心とすべきだと思う。失敗を恐れて、やるべきことをせず、従来の考えを放棄すべきではない。しかしながら、今日の情勢は大きく異なってお

り、日本は新たな考えも持つべきである。相互協力を原則とし、一方で新たな大陸政策を定め、これによって日本とアジアの復興の重点とするのである。岸総理の考えは分らないが、どう思うか。私は日本が東南アジアの発展に注力していることは理解しているが、長期的に見れば、そのことは最重要ではなく、その次の問題ではないか。仮に中華民国の大陸が共匪による侵略状態では、大陸の民衆は日本と協力することは不可能である。このような状況下において、いわゆる東南アジアの地位は表面的なものである。日本には、中華民国を支持し、大陸を取り戻すべく新たな大陸政策を樹立してもらいたいと思っている。現状において日本が東南アジアを重視していることは、どうしようもないことだが、大局的な観点から大陸問題を忘却してはならない。もし共匪による大陸支配が継続すれば、日本が確固たる地位を築こうにも絶対に不可能となる。日本が独立と自由、国家の安全保障の維持を望んだとしても、北方にソ連、西方に共匪が存在していたら、それができなくなる。岸総理には時機を把握し、中心となって、私の貴国に対する期待に応えてくれることを願って止まない。（後略）

岸（前略）大陸の現状は、中華民国のみの問題ではなく、日本の問題でもある。しかも、日本人はロシア（ソ連）に対して、明治維新以来、極めて強い敵愾心を抱いており、一部の共産党員を除けば、大多数の国民は例外なしに、このような状態である。中国については状況が全く異なり、民族と歴史の関係から日本人の大多数は中国に対して一種の親近感を持っている。中共によって大陸が侵略されて以降は、多くの日本人には、こうした伝統的な感情によって中共に対する錯覚が存在している。共産党や社会党といった左派は、この種の国民心理を利用して、しばしば国民を煽

惑している。例えば、以前、社会党議員団が中共を訪問したことは国民心理に大きな影響を与えた。一方で社会党は過去に訪問団を組織してソ連にも赴いているが、その影響は僅かなもので、国民の反感も招いている。中共による大陸への侵略について、日本は危機感を持っており、自由中国には光復大陸の努力をしてもらいたいと思っており、深く同情する。

台湾の公式記録では、「大陸を取り戻す」ことに対して、岸は「自由中国には光復大陸の努力をしてもらいたいと思っており、深く同情する」と応じている。確かに「努力をしてもらいたい」という言い回しは「大陸を取り戻す」ことに賛同していると受け止められかねない表現ではある。4日の会談録は以下の通りである⁽⁴²⁾。

岸（前略）日本人の中国に対する考えは、その淵源は深い。中国は5000年にも及ぶ歴史があり、日中は2000年に近い関係を持っている。したがって、日本人は中国の話をするれば、強い親近感を持つばかりで、初めから思想問題には考えが及ばない。日本の中国大陸との貿易に関しても、特に大阪を中心とする中小企業は、もともと大陸と商売上の往来があり、今も大陸で事業ができるのであれば、たちまち多くの人々が期待し殺到する。したがって、今、日本は政治上、中共とは外交関係を樹立せず、国連の中共に対する支援にも何も協力しないことを決定しているが、日本国民の大陸との往来断絶、貿易禁止については、理論的には可能かもしれないが、実際には絶対に不可能である。この点を理解してもらいたい。

蔣（前略）今、日本と大陸との貿易について述べたが、これも現実的問題で、私は、それに関する評価を述べることは保留したい。

ただ、もし日本が共匪に対し日本における貿易代表機構の設立を認め、彼らの公然たる活動を放任するのであれば、共匪は日本において、これを浸透活動の拠点とするだろう。そして日本の反共政策の実行を妨げ、その被害は極めて大きなものとなるだろう。したがって私は、この種の共匪からの要求に対して貴国は断固として容認すべきではないと考えている。（中略）私たちが認識しなければならないのは、今、ソ連はアジアに対する重要目標を2つ持っていることである。1つは台湾を消滅させることで、もう1つは日本を赤化することである。これら2つの目標を仮に達成することができたとすれば、ソ連のアジア支配は問題がなくなる。それは中華民国と日本のうち、一方は滅亡、もう一方は存続できるという道を進むということである。したがって、両国は心からの協力をしなければならない。日本が安定を得られれば、中華民国も「大陸反攻」が達成できる。両国の協力は本当の力によるものである。以上のことから私たちには共通の認識が必要であると考え。第1に、ソ連は日本と中華民国の共同の敵であるということ。第2に、日本と中華民国は必ず共同で反共に当らなければならないこと。なぜなら、中国大陆はソ連の支配下にあるからであり、私たちが反攻せず、共匪を打倒せず、大陸を取り戻さず、日本の力だけでソ連に対処することは不十分だからである。中国大陆を取り戻すには、日本と中華民国が人的にも物的にも協調し、共同でソ連に対処しなければならない。そうすることで初めて成功できる。閣下の考えはどうか。

岸 その考えに全く同意する。

蔣（前略）中華民国と日本はアジアにおいて互いに支え合い、協力することが必要である。一方が減れば、もう一方も生存できなくなる。したがって、私たちの関係から見て、「大陸反攻」につい

て、日本は精神上、道義上、国際政治上、国内政策上、どのような点からも協力すべきであると考え。大陸を取り戻した暁には、私たちの協力は、真にソ連に対抗し、東アジアの安定という目的を達成できる。

岸 今の総統の話は非常に深い印象を受けた。今回、総統の高見を承り非常に有益であった。(後略)

「日本の中国大陸との貿易」に関し、蒋介石は批評を避け、その上で切々と「大陸反攻」の必要性を訴えている。岸は、それについての具体的なコメントはせず「その考えに全く同意する」とだけ答えた。蒋介石からすれば、当然、岸は「大陸反攻」にも「同意」したと理解するだろう。

しかしながら、岸は端から蒋介石の主張する「大陸反攻」は不可能と見ていた。後年、岸は「台湾が大陸に対して軍事的な反攻をするといっても、これは大変なことで実際にできるものではないですよ。大変な犠牲が出るんですから」と語っている⁽⁴³⁾。国会の場においても、例えば台湾訪問前の2月12日に行われた衆議院外務委員会で外務大臣として答弁に立った岸は「大陸反攻をするとかなんとかいうことは、これは考え得られない情勢である」と述べ、帰国後の9月2日の衆議院内閣委員会でも「大陸反攻」に対して「激励するとか応援したことはありません」と言明している。したがって、従来、通説とされてきた「大陸反攻」支持発言は蒋介石の誤解、あるいは意図的に岸の発言を誇張したものであったと解される。

以降、岸は台湾訪問の度に複数回に亘って蒋介石と会談を行っているが、本人に向かって「大陸反攻ということを企てても、軍事的にこれを実現することはほとんど不可能に近い」と言い、「それよりは、この台湾で理想的な国家をつくって、大陸の大衆の生活と台湾における大衆の生活を比較して、台湾こそ王道楽土だということを示せばよいのです。つまり

蔣介石総統の政治が台湾の大衆に豊かな生活をもたらし、北京政府のやり方が国民大衆をいかにひどい目に遭わせているかということを示せばいいんです。彼我の差がはっきりすれば、蔣介石の政治が宣伝になって、大陸をさらに追い詰めていくだろう」と進言したこともあった⁽⁴⁴⁾。もちろん、これに蔣介石が反発したことは言わずもがなである。

4. 本省人差別と「中華民国」への拘り

やがて岸信介は頻繁に台湾に足を運ぶようになり、蔣介石との交情を温めていった。岸、そして池田勇人の後、首相となった実弟の佐藤栄作も1967年9月に台湾を訪れている。戦後の現職首相による台湾訪問は岸に次いで2人目であった。

1971年10月の国連脱退、1972年9月の日中国交正常化による中華民国との断交後も、岸と台湾との交流は続いた。翌年3月には岸を始め断交を憂う保守系が集まり自民党単独の議員連盟として「日華関係議員懇談会」を立ち上げる。1974年10月、蔣介石が米寿を迎えた時も、岸は韓国訪問中でありながら途中で日華関係議員懇談会の祝賀団に合流し台湾へ赴いた。

翌年4月の蔣介石逝去に際しては、岸を含む弔問団が大挙して台湾へ飛んだ⁽⁴⁵⁾。その際、佐藤が事実上、首相の三木武夫の代理として国葬に参列した。この時、日華関係議員懇談会が中心となり日本でも文京公会堂と北御堂（本願寺津村別院）の2ヵ所で「故蔣介石閣下追悼式」が催されている。

1985年10月、蔣介石の生誕100周年を記念し、岸は日華関係議員懇談会の会長である灘尾弘吉と並んで代表となって「蔣介石先生の遺徳を顕彰する会」を発足させた。「以德報怨」は蔣介石の「寛大な大英断」であり、「深遠なる哲理、東洋道徳に裏打ちされた余りにも偉大な思想」で、この

「感動に満ちた歴史を想起すると同時に、これを明日に向かって飛躍する私どもの精神的な糧とする」ことを趣旨にした民間団体である⁽⁴⁶⁾。翌年9月4日には東京プリンスホテルを会場に「蔣介石先生の遺徳を偲ぶ夕べ」を開き、約3,500もの参加者を集めた。台湾の国史館が所蔵している会場の様子を映した写真を見ると、正面ステージ上に「日の丸」と中華民国国旗「青天白日満地紅旗」が並び立ち、後ろには蔣介石の遺影と「以德報怨」と書かれたパネルが飾られ、右脇に考試院長の孔徳成や亜東関係協会東京弁事処代表の馬紀壯の姿が写っているのが分かる⁽⁴⁷⁾。

さらに遺品資料・文物展示会の開催、蔣介石の写真集を始めとする記念出版物の刊行といった蔣介石を讃える国民運動を全国で繰り広げた。日本と深い関わりがあるとは言え、外国の元首を大々的に顕彰するのは前代未聞のことであった。

しかしながら、岸は無条件に蔣介石を賛美していたわけではなかった。少なからず不信の念を抱いていたことも事実である。

特に腑に落ちなかったのが蔣介石による本省人差別である。蔣介石と一緒に中国大陆から台湾にやって来た外省人が政権中枢に君臨し、戦前から台湾に住んでいる本省人を治める構図に強い違和感を覚えていた。

台湾では1947年2月28日に勃発した国府（国民政府）に対する本省人の反乱事件「二・二八事件」の際、国府による大規模な無差別殺戮によって大勢の本省人が犠牲となり、1949年5月には戒厳令が布かれ、いわゆる「白色テロ」の下に置かれる。監視と摘発の天羅地網が張られ、国府への批判、抵抗は許されず、本省人は政治的沈黙を強いられた。

岸は蔣介石に「一見して、台湾の人は数はずっと多いのに、中国からきた人と差別的な扱い」であり、「政府、重要な議員や歴史的な地位はほとんど大陸からきた人で占められ台湾人に対しては非常な不平等だ」と述べた⁽⁴⁸⁾。岸が不審に思うのは無理もない。当時、国府にとって本省人のエリートたちが肅清の標的であっただけに、「台湾人の指導者のほとんどが

殺害」され、あるいは「検挙されて、長期にわたり投獄」の憂き目に遭っていた⁽⁴⁹⁾。

当然、蔣介石は岸の助言を突っ撥ねた。「毋忘在莒」という言葉を持ち出し、「岸君、われわれはここに長くいるつもりはない」と言い、続けて「台湾の人はとにかくずっとここにいて、根がはえているから生活には困らないが、おれについてきた連中はすべてのものをみんな大陸に置いてきているものなんだ。私も不平等であるということは分かっているんだけど、おれなんか長くいるつもりじゃない。きっとその償いはできると思う」と言い訳とも取れる答えが返ってきたという⁽⁵⁰⁾。

岸は「中華民国」への拘りにも釈然としない思いを抱えていた。1971年秋の国連総会で、国連における中華人民共和国の加盟、中華民国の追放を謳った決議案「アルバニア案」が可決し、これにより台湾は国連からの脱退を表明する。その際、岸は最後まで中華民国を擁護した。しかも、蔣介石に対して以下のような提案をしたこともあったという⁽⁵¹⁾。

69年、すでに政権の座を降りていた岸信介元首相が極秘に訪台し、蔣介石総統に、台湾独立も視野に国連への残留を勧めていたことが、関係者の話で明らかになった。

これは「産経新聞」が2006年8月31日朝刊で報じたものである。「関係者」とは黄昭堂と辜寬敏である。2人は台湾独立運動の重鎮として知られている。「黄氏が晩年の岸氏から聞いた」ところによると、国連における中華民国の追放が囁かれ始めた「69年」に極秘訪台し蔣介石に「国連安保理を離れて一般加盟国に留まってはどうか」と提案したという。当時、中華民国は安保理の常任理事国である。岸は、いずれ追放されるのであれば、安保理の「中華民国」としてのポストは放棄し、名前を「台湾」に変えれば、一般の加盟国として国連の議席は維持できると考えたように

ある。

一方、辜寬敏に対しても岸は「台湾共和国とするならそれでもいい。台湾は追い出される前に国連に残ってほしい」との思いを打ち明けたらしい。ただ、辜寬敏によると、岸は当時、台湾の行く末を案じてはいたが、黄昭堂が言うように、蔣介石本人に向かって、このような提案をしたとのエピソードは聞いた記憶がないという⁽⁵²⁾。

2人の証言には若干の食い違いがあるものの、岸は台湾が国連に残れる方法を思案していたことは事実であろう。中国大陆から台湾に移転した中華民國は台湾の人々からすれば所詮は外来物である。しかし、国名変更は蔣介石にとって自らの正統性に関わるものでもあった。

「産経新聞」の記事では、岸が極秘訪台したのは「69年」となっている。確かに岸は台湾側の記録によると、この年の11月18日から29日まで台湾を訪れ⁽⁵³⁾、24日午後6時30分から30分間、蔣介石と会談している⁽⁵⁴⁾。台湾、それに日本でも⁽⁵⁵⁾、会談録が公開されていないため内容は不明だが、「国連への残留を勧めていた」とすれば、この時であろう。

30分という限られた時間の中で、果たして、ここまで政治的機微に触れる会談ができたのであろうか。些か違和感を覚える。しかし、仮に蔣介石が岸の提案を吞んでいれば今日の国際社会における台湾のポジションは全く違うものになっていたかもしれない。

おわりに

生前、岸信介と蔣介石は刎頸の交わりを結んだ。しかし、そこには友情や信頼といったレベルでは測れることのできない複雑なものがあつた。辜寬敏も、岸の蔣介石礼讃は一種のポーズであり、アメリカはもちろん、日本にとっても「反共の砦」である台湾を守るためには蔣介石を阿諛する必要があつたからではないかと述べている⁽⁵⁶⁾。

岸が他界した5ヵ月の1988年1月13日、蒋介石の後を継いだ長男の蔣経国が急逝し、憲法の規定により副総統で本省人の李登輝が総統職に就くと、台湾は加速度的に民主化が進んだ。1996年3月には総統直接民選が実施される。李登輝は総統在任期間を振り返り「『民主化』と『台湾本土化』の政策を実行」し、その結果として台湾の人々は「国民党の統制から離れて、台湾主体の観念をもつように」になったと述べている⁽⁵⁷⁾。李登輝によって中華民国の台湾化が図られていったのである。

2000年3月には李登輝と同じ本省人である民進党の陳水扁が総統となり、55年にも及ぶ国民党による長期政権が幕を閉じる。陳水扁は、戦後の国府による圧政と本省人に対する残虐行為の元凶として蒋介石を名指しで批判し、その痕跡を消すキャンペーンを繰り広げた。公共施設に設置されている蒋介石の銅像を次々に撤去し、さらに「中国」や「中華」の呼称を「台湾」に変える「正名運動」を推し進め、受理はされなかったものの「台湾」名での国連加盟を目指した。

2008年5月、再び国民党が復権し、新たに外省人系の馬英九が総統となった後も、その流れは変わらなかった。馬英九は陳水扁が一挙に進めた台湾化と決別し、中華民国への回帰を目指そうとしたもの、一般には「国家名称としては中華民国だけれど、実は台湾なのだから、日常的には台湾で通すということは変わ」らなかった⁽⁵⁸⁾。日本でも「台湾」という言葉は日常的に用いられるが、「中華民国」という言葉は多くの日本人にとっては耳慣れないものとなっている。明らかに岸が行き来していた頃の台湾とは全く異なる状況となった。

2016年5月に民進党が8年ぶりに政権奪還を果たし、新しく総統に就任した本省人の蔡英文も、陳水扁と同じく蒋介石偶像の排除、中華民国の台湾化を進めており、政権中枢の重要ポストも本省人で占められている。その意味において、この四半世紀で、岸が蒋介石に対して抱いていた疑念は徐々に払拭されつつあると言えよう。

《注》

- (1) 若宮啓文,『戦後 70 年保守のアジア観』,朝日新聞出版,2014 年,340 頁。
- (2) 同上。
- (3) 本澤二郎,「政治を斬る !! 台湾ロビー②」,『財界につぼん』2008 年 7 月号,財界につぼん,2008 年,52 頁。
- (4) 吉田茂,『激動の百年史:わが決断と奇跡の転換』,白川書院,1978 年,162-163 頁。
- (5) 長谷川貴志,「第 4 次日中民間貿易協定締結問題と日本外務省:日華紛争への本省と在外公館の対応」,『駒沢史学』第 83 号,駒沢史学会,2014 年,49 頁。
- (6) 原彬久編,『岸信介証言録』,毎日新聞社,2003 年,359 頁。
- (7) 原彬久,『岸信介:権勢の政治家』,岩波書店,1995 年,151 頁。
- (8) 岸信介,「空飛ぶ外相に」,『中央公論』1957 年 3 月号,中央公論社,1957 年,80 頁。
- (9) 田才徳彦,「自由民主党にみる『親中国派』と『親台湾派』の相克:冷戦下における対立の要因と諸相」,『横浜商大論集』第 39 巻第 2 号,横浜商科大学学術研究会,2006 年,69 頁。
- (10) 矢次一夫,『わが浪人外交を語る』,東洋経済新報社,1973 年,23 頁。
- (11) 「有關中日協力機關之試案」(年月日不明),『中日合作策進委員會』第 1 冊,中央研究院近代史研究所檔案館,館藏號 11-01-02-15-04-024,舊檔號 013.3/0034,影像編號 11-EAP-01748。
- (12) 「中日合作策進委員會組織規程」(年月日不明),『中日合作策進委員會』第 1 冊,中央研究院近代史研究所檔案館,館藏號 11-01-02-15-04-024,舊檔號 013.3/0034,影像編號 11-EAP-01748。
- (13) 池井優,「日華協力委員会:戦後日台関係の一考察」,『法学研究』第 53 巻第 2 号,慶應義塾大学法学研究会,1980 年,146 頁。
- (14) 若宮啓文,前掲書,344 頁。
- (15) 台湾史研究部会編,『台湾の近代と日本』,中京大学社会科学研究所,2003 年,140 頁。
- (16) 本澤二郎,『台湾ロビー』,データハウス,1998 年,120 頁。
- (17) 全文は黄自進主編,『蔣中正先生対日言論選集』,台北:財団法人中正文教基金会出版,2004 年,942-944 頁を参照。
- (18) 賀屋興宣,『戦前・戦後 80 年』,浪曼,1972 年,331 頁。
- (19) 台湾史研究部会編,前掲書,139 頁。日本には蔣介石を顕彰する事物が数多く散見される。例えば,蔣公頌徳碑(神奈川県横浜市),以德報怨之碑

（千葉県いすみ市）、さらに蔣介石を祭神とする中正神社（愛知県額田郡幸田町）、日蓮宗大本山中山法華経寺（千葉県市川市）の境内には蔣介石の胸像が建っている。

- (20) サンケイ新聞社編、『蔣介石秘録：日中関係 80 年の証言』（下）改訂特装版，サンケイ出版，1985 年，411 頁。
- (21) 田才徳彦，前掲書，54 頁。
- (22) 石田博英，『石橋政権・71 日』，行政問題研究所出版局，1985 年，158-160 頁。
- (23) 詳細は拙稿，「岸信介とアジア：『思想的基盤』の形成と展開」，『海外事情』第 66 巻第 3・4 号，拓殖大学海外事情研究所，2018 年，116-128 頁参照。
- (24) 岸信介，矢次一夫，伊藤隆，『岸信介の回想』，文藝春秋，1981 年，167 頁。
- (25) 「在中華民国特命全權大使堀内謙介発外務大臣臨時代理國務大臣石井光次郎宛電信：岸総理大臣一行訪問中の当国の接待振りに関する件第 739 号」（1957 年 6 月 18 日），『岸総理第一次東南アジア訪問関係一件（1957・6）訪問国の接待ぶり』，外務省外交史料館，分類番号 A'1.5.3-8 MF/CR 番号 A'-0153。
- (26) 蔣介石先生の遺徳を顕彰する会編，『以德報怨：写真集「蔣介石先生の遺徳を偲ぶ」』，蔣介石先生の遺徳を顕彰する会，1986 年，5 頁。
- (27) 岸信介，矢次一夫，伊藤隆，『岸信介の回想』，文藝春秋，1981 年，174-175 頁。
- (28) 蔣介石先生の遺徳を顕彰する会編，前掲書，5 頁。
- (29) 「堀内大使発石井大臣臨時代理宛電信：岸総理蔣總統と会談の件第 148 号（大至急）」（1957 年 6 月 4 日），『岸総理第一次東南アジア訪問関係一件（1957・6）タイ，中華民国の部』，外務省外交史料館，分類番号 A'1.5.3-1，MF/CR 番号 A'-0152。
- (30) 同上。
- (31) 「總統與日總理大臣岸信介談話紀錄」（1959 年 6 月 3 日），『岸信介訪華』，中央研究院近代史研究所檔案館，館藏號 11-01-02-10-02-087，舊檔號 012.22/0082，影像編號 11-EAP-01069。
- (32) 同上。
- (33) 「蔣總統與日本總理大臣岸信介談話紀錄」（1959 年 6 月 4 日），『岸信介訪華』，中央研究院近代史研究所檔案館，館藏號 11-01-02-10-02-087，舊檔號 012.22/0082，影像編號 11-EAP-01069。

- (34) 堀内大使発石井大臣臨時代理宛電信：岸総理蔣總統と会談に関する件第153号（大至急）」（1957年6月4日），『岸総理第一次東南アジア訪問関係一件（1957・6）タイ，中華民国の部』，外務省外交史料館，分類番号A'1.5.3-1，MF/CR番号A'-0152。
- (35) 「蔣總統與日本總理大臣岸信介談話紀錄」（1959年6月4日），『岸信介訪華』，中央研究院近代史研究所檔案館，館藏號11-01-02-10-02-087，舊檔號012.22/0082，影像編號11-EAP-01069。
- (36) 小山展弘，『脱占領時代の対中政策：戦後の日本は中国とどう向き合ったか』，志學社，2012年，100頁。
- (37) 古川万太郎，『日中戦後関係史』，原書房，1981年，139頁。
- (38) 「朝日新聞」，1957年6月4日朝刊。
- (39) 「岸総理・蔣總統第一次会談録」（1957年6月3日），『岸総理第一次東南アジア訪問関係一件（1957・6）会談録』，外務省外交史料館，分類番号A'1.5.1.3-5，現物公開。
- (40) 「岸総理・蔣總統第二次会談録」（1957年6月4日），『岸総理第一次東南アジア訪問関係一件（1957・6）会談録』，外務省外交史料館，分類番号A'1.5.1.3-5，現物公開。
- (41) 「總統與日總理大臣岸信介談話紀錄」（1959年6月3日），『岸信介訪華』，中央研究院近代史研究所檔案館，館藏號11-01-02-10-02-087，舊檔號012.22/0082，影像編號11-EAP-01069。
- (42) 「蔣總統與日本總理大臣岸信介談話紀錄」（1959年6月4日），『岸信介訪華』，中央研究院近代史研究所檔案館，館藏號11-01-02-10-02-087，舊檔號012.22/0082，影像編號11-EAP-01069。
- (43) 原彬久編，前掲書，160頁。
- (44) 同上書，159-160頁。
- (45) 公式発表では1975年4月5日，心臓発作により87歳で死亡したとされている。しかし，実際には2年前の1973年11月14日に死亡していたという説もある。権力基盤が軟弱だった長男の蔣経国に総統ポストを移譲するのに十分な時間が必要だったため，加えて4月5日は日本でいう彼岸に当る清明節であり先祖供養と蔣介石追悼を重ね合せることにより国中を鎮魂の空気に包もうとしたのである（楊逸舟，『蔣介石評伝』（下巻），共栄書房，1983年，374頁）。
- (46) 蔣介石先生の遺徳を顕彰する会編，前掲書，103頁。
- (47) 「蔣中正遺徳顯彰會會場主席台一隅」（1986年9月4日），国史館，數位典藏號002-050114-00001-043，隸屬卷名／件號『日本人士紀念蔣公遺徳顯

彰會現場照片影集』／043。

- (48) 岸信介，矢次一夫，伊藤隆，前掲書，176 頁。
- (49) 伊藤潔，『台湾：400 年の歴史と展望』，中央公論社，1993 年，159 頁。
- (50) 岸信介，矢次一夫，伊藤隆，前掲書，176 頁。
- (51) 「産経新聞」，2006 年 8 月 31 日朝刊。
- (52) ゴルフ愛好家の辜寬敏と岸が出会ったのは，神奈川県茅ヶ崎市にある名門ゴルフ場で知られるスリーハンドレッドクラブだった。岸は現職首相で，辜寬敏は日本亡命中だった。当初は会釈する程度だったが，やがて親密な仲になっていったという（辜寬敏へのインタビューによる（2018 年 3 月 19 日，榮星企業股份有限公司において））。
- (53) 「中華民國五十八年十一月訪華外賓預報」（年月日不明），『訪華貴賓名録（十一）』，中央研究院近代史研究所檔案館，館藏號 11-38-08-00-046，舊檔號 736.3，影像編號 020-100800-0046。
- (54) 「總統蔣中正接見日本前首相岸信介」（1969 年 11 月 24 日），国史館，數位典藏號 002-110101-00069-019，隸屬卷名／件號『總統事略日記』58.11/019。
- (55) 筆者は 2018 年 4 月 27 日，情報公開法に基づき，外務省大臣官房総務課外交記録・情報公開室に対し，この時の会談録，あるいは，その要旨を綴った行政文書の開示請求をしたものの，6 月 26 日に「関係するファイル内を探索しましたが，該当する文書を発見できなかったため，不開示（不存在）としました」との回答が届いた（開示請求番号 2018-00030）。
- (56) 辜寬敏へのインタビューによる。
- (57) 李登輝，『日台の「心と心の絆」：素晴らしき日本人へ』，宝島社，2012 年，110 頁。
- (58) 浅野和生，『親台論：日本と台湾の心の絆』，ごま書房新社，2014 年，199-201 頁。